

英 語（リスニング）

第 1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

令和 5 年度大学入学共通テストの「英語（リスニング）」の受験者は、本試験が461,993人（昨年度の本試験は479,039人）で、受験者全体の約98.02%（昨年度は98.3%）に当たる。このことは、本テストの実施そのものや、問題の質や難易度、使用される言語材料等が、受験者のみならず、全国の高等学校関係者及び英語教育関係者等、多方面に与える影響が非常に大きいことを意味している。満点は「英語（リーディング）」と同じ100点であり、平均点は62.35点（昨年は59.45点）であった。

「英語（リスニング）」について検討・評価した項目は、14ページに記載の 8 つの観点についてである。また評価に当たり、以下の 5 つの資料を主に参考とした。

- (1) 高等学校学習指導要領解説（平成21年告示）外国語編・英語編
- (2) 令和 5 年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針
- (3) 「コミュニケーション英語Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅱ」、「英語表現Ⅰ」の検定教科書
- (4) 令和 4 年度大学入学共通テスト「英語（リスニング）」（本試験）
- (5) 令和 4 年度大学入学共通テスト 試験問題評価委員会報告書（本試験）

2 内 容・範 囲

高等学校で学ぶ「コミュニケーション英語Ⅰ」「コミュニケーション英語Ⅱ」「英語表現Ⅰ」の内容・範囲を網羅しており、日常の身近な問題から社会問題まで、幅広い分野からの情報を整理する問題や話者の意図や図表が表す内容を聞き取って解答する問題、講義を聞いて内容をまとめる問題などで構成されていた。

第 1 問 A モノログではあるが、他者に話しかける設定の文を、第三者的な立場からの英文に言い換えられたものを解答する問題。日常生活でよく見られる場面設定であり、基本的な語彙が使われている。問 2 や問 3 で、発言の中に出てくる完了形や関係代名詞の省略などが聞き分けられるかがポイントである。

第 1 問 B 1～2 文からなる短い英文が表す最も適切な絵を選ぶ問題。問 5 のびんの中の茶の量(not much)を問う問題や、問 6 の牛の位置 (behind the fence) を判断する問題もあった。

第 2 問 二人の短い対話を聞き、適切なイラストを選ぶ問題。問 8 のアバター等、現代の流行を意識した話題も出題されている。

第 3 問 男女二人の短い対話を聞き、対話の内容や対話の後に予測される行動を選ぶ問題。

第 4 問 A 問 18～21 は講義を聞いてワークシートを完成させる問題。選択肢順に説明されているので分かりやすい。問 22～25 は、ゲーム大会主催者の話を聞き、表を完成させる問題。英文が流れる前の短時間に図表が何を表しているかも正確に読み取る力が必要。

第 4 問 B 四人の演説を聞き、条件を満たす人物を答える問題。

第 5 問 「アジアゾウ」についての講義を聞きワークシートにまとめる問題。昨年の「ギグ・ワーク」と比較すると、受験者にはなじみもあり背景知識もあるため聞き取りやすかったと考えられる。問 27～31 はワークシートが英文の流れに沿っているので、比較的解答しやすい。

第 6 問 A ソロハイキングについて二人の登場人物の気持ちの変化を聞き取る問題。全体的には聞

きやすい内容である。

第6問B 就職が決まった若者四人が都市部と郊外どちらに住むかについての議論をしている場面聞き、問いに答える問題。トピックは受験者にとって身近である。

3 分量・程度

出題の形式は昨年と大きな変更はなく、設問数も大問が6問、設問37問で同じであった。読み上げ回数も変更はなく、第1問～第2問が2回、第3問～第6問が1回であった。アメリカ英語、イギリス英語、そして英語を母国語としない話者の英語など多様な英語が使用されていたが、全体的に音声は聞き取りやすかった。以下、準備時間をP、音声が進む時間をL、解答時間をAで示す。

第1問A（各英文10語～14語・2回読み、L：約8秒×2・A：約10秒）1～2文の短い英文を聞き、概要を正しく把握して最も適切な選択肢（文）を選ぶ問題。関係代名詞が省略された英文や完了形が含まれた英文があり、解答のばらつきが見られる問いもあったが、全体的には易しい問題であった。（難易度 ☆）

第1問B（各英文8語～12語・2回読み、L：約5～8秒×2・A：約10秒）1～2文の短い英文を聞き、その英文が表している選択肢（イラスト）を選ぶ問題。4種類のイラストの差が分かりやすく、全体的に易しい問題であった。（難易度 ☆）

第2問（各対話文25語～30語・各設問5語～8語・2回読み、L：約20秒×2・A：約10秒）全体としては標準的な問題であるが、問9だけは間接的に内容を問われており、難易度は高かった。（難易度 ☆）

第3問（各対話文42語～51語・1回読み、L：約22秒・A：約8秒）難易度は標準である。（難易度 ☆☆）

第4問A（英文問18～21＝81語・1回読み、L：約47秒・A：約16秒 / 問22～25＝78語・1回読み、L：約43秒・A：約32秒）（難易度 ☆～☆☆）

第4問B（四人の各話者＝40語～44語・1回読み、P：約15秒・L：約100秒・A：約9秒）解答時間は短いですが、聞きながら整理し、発言している人物をきちんと把握できれば正解を導き出すことができる標準的な問題である。（難易度 ☆）

第5問（英文講義＝271語 / プレゼンテーション＝49語・1回読み、P：約54秒・L：約180秒・A：約100秒）音声は聞き取りやすく、スピードも比較的ゆっくりだった。（難易度 ☆☆～☆☆☆）

第6問A（対話文全体＝161語・1回読み、P：約15秒・L：約70秒・A：約20秒）問35は、対話が終わった段階での母親の考えを答えるため、最後まで集中して聞く必要があり、比較的難しかった。（難易度 ☆☆）

第6問B（英文全体＝222語・1回読み、P：約12秒・L：約105秒・A：約30秒）難易度は高かったが、四人の発話は聞きやすく、容易に四人の聞き分けができた。（難易度 ☆☆☆）

4 表現・形式

第1問A 短いモノログに合う英文を選ぶ設問形式。問題文と選択肢で言い換えがされていて知識・技能に加え思考力を問う問題も含まれている。特に問4では、単に数字の足し算では解答できず、時制表現で状況の把握が求められている。選択肢は、問4以外“The speaker...”に統一されている。

第1問B 短いモノログに合うイラストを選ぶ設問形式。イラストが解答への補助となり正答率はおおむね高い。問5についても6割以上が正解しているが、not muchの理解が試された形となった。There isn't muchでなく、There's not muchと発音されたことが理解につながったと思われる。

る。問6では、“I can’t see any cows.”とあるが、①のイラストでは牛の姿がほぼ見えているので、混乱の原因を除くために、例えば牛の足元をもう少しフェンスと重ねるなどするとより説明に近いイラストになるであろう。

第2問 短いダイアログに合うイラストを選ぶ設問形式。状況は説明されているが、問いは書かれていない。1回目の質問後に2回目のダイアログを聞くことができ、正答率が高い。特に問11はmeet upという会話的な表現はあったが、状況を把握しやすい問題であるため、正答率9割を超えた。第2問の最初の問題としてより適切であったかもしれない。逆に、問9は正答率が約2割という低さとなったが、指示語が聞き取りのみでは理解しにくく、特に、That oneのoneをごみ箱ではなく持っているものと捉えてしまい、誤答③のglass用のごみ箱を選択してしまったと考えられる。英文の読み方や表現を更に工夫することで、受験者の勘違いを避けることができた可能性がある。

第3問 短いダイアログを聞き、問いに答える形式。状況が説明され、問いも書かれているので、ダイアログを聞く前に問いを読んでおくことで、正答しやすくなるだろう。アメリカ英語以外の話者も含まれていたが、その点において聞き取る上で大きな影響はなかったと思われる。問15では、LondonとUKとの関係性の知識を含めて問う必要はなく、内容の言い換え（動詞部分）の理解を問うことに重きを置き、④をHe was born in London.としていても、受験者の理解力は十分問えたのではないかと考える。1回読みの問いであり、場面設定が分かりにくかった。問16では、runny noseやallergiesなどややなじみのない表現やdrop byなどオーセンティックな表現が重なったためか、正答率も5割に満たなかった。症状の様子等の追加情報があれば理解につながりやすかったかもしれない。問17では、buyかadoptという最近の話題に触れ、かつ、会話の中で説明もされていて良い。

第4問A 放送文の内容に沿って情報を整理する問題であり、図表やグラフを完成させる形式。問18～21は、the second most chosen, significantlyやslightlyなどの副詞表現を理解することが難しい受験者も多く存在すると思われる。実際の授業での探究活動等での英語での発表における指導に結び付けることも可能であるが、実際には平易な表現で発表する場合が多く想定される。本テストでの英文はやはりリスニング問題の設定であるため、発表指導につなげていくには若干チャレンジングな語彙となり、対象生徒層については配慮がなされるべきかもしれない。問22～25では、表のスタイルになじみがなく若干把握しにくかった可能性があるため、チーム名をコンパクトにしたり、イラストを付けたりするなどの工夫ができたかもしれない。

第4問B 四人の説明を聞き、条件に合うものを選ぶ問題。状況や条件は日本語で書かれており、放送が始まる前に、条件を理解しておけるかもポイントになる。話者に英語を母語としない者も含まれていた。正答率は高かったが、fewerやI don’t thinkで始まる否定の表現等、英語らしい表現が多く使われていて、授業における基本の表現の定着の重要性を示すメッセージとなっている。

第5問 アジアゾウについての講義を聞き、ワークシートに要点をまとめる形式。要点を把握して内容をまとめる力や、図の情報と組み合わせて総合的に判断する力が問われている。ワークシートは講義の流れに沿って整理されている。選択肢には、skincareがcosmeticsに、socialやhelping each otherがcooperativeになど、多くの言い換えが含まれ難易度を上げている点も見られるが、授業等においてリテリングやサマリー等を取り入れることで様々な言い換えをしながら多種多様な英語を自ら生み出す力を付けることの大切さを示すものとなっている。また、正答率が低かった、問31の正解である③deathsについては、講義中のdeadly incidentsと関連付けて考えることが難しかったのではと考えられる。問33は、グラフが示され、なおかつ、追加された英文を聞き講義全体の内容も考慮すべきという統合的な問いであるが、追加の英文については、あくまで補足情報の

設定になっており、聞く必要性について若干疑問が残る。

第6問A 親子の会話を聞き、要点を聞き取る問題。会話には自然なやり取りが多用され、オーセンティックなものになっている。That's a good point.やI guess not., Why not～?など、知識はあっても、実際に授業において使用されることは余りないかもしれないので、スモールトーク等を活用しながら高校の授業でも使用する必要がある。問35の誤答の形容詞は、明らかに誤答と分かるため、更に工夫が必要である。

第6問B 就職が決まった若者四人が都市部と郊外のどちらに住むかについて議論している場面聞き、要点をつかんだり、複数のグラフや表を識別したりする問題。議論の概要、要点を理解して、情報を整理する力が問われている。昨年度は賛成か反対かの人数を問う問題であったが、今年は具体的に人物を選ぶ問題となり正答率は下がったものの、受験者はメモを取りながら聞いていると想定できるので、個人を問う方が解答しやすいと思われる。決めかねているMaryについては判断が難しかったようであり、I have to think again.のセリフのあとに、dogに対する思いを後押しするセリフが続いていてもよかったのではと考える。そうすると、受験者にもヒントとなったであろう。

5 ま と め（総括的な評価）

実生活に基づいた状況設定のもと、コミュニケーション全体の内容を理解して含意を汲み取り、素早く適切な解答を出すための思考力・判断力・表現力等が求められている。高校の日頃の授業でも、実際に英語でコミュニケーションを取る場面や状況を与え、全体の会話の流れや内容把握を体験的に学ばせていく必要がある。言い換え表現を意識させながら、実際に英語を使う活動を盛り込む授業設計と指導の在り方を追求していくことが大切である。

(1) 形式等の特徴

実施時間は30分、1問あたりの配点は1～4点の幅があり、読む回数は2回読み（第1問と第2問）と1回読み（第3問～第6問）に分かれ、満点は100点であった。昨年度に引き続き、本テストでは「リーディング」と「リスニング」がともに100点満点で構成されていたことから、より英語4技能のバランスを意識したものであると言える。流れてくる英文の長さ、選択肢の長さや解答時間も、受験者の理解力を測るのに適切なもので、評価したい。また設問や場面設定の指示が日本語で記載されており、測る力を「聞く力」に絞るための措置として有効である。読む回数については、試験前半における2回読みは、受験者が試験のリスニングに慣れるのに必要な配慮と考えられる。しかし、聞く内容から判断すると、第2問の日常的な会話は、読む回数を1回に、また、第5問での講義の内容をワークシートや図表をあわせて答える問題は、読む回数を2回とすることも今後検討していくべきかもしれない。

(2) 学習指導要領との整合性

情報や考えを的確に理解したり適切に表現したり伝えあったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成することは、学習指導要領の外国語科の目標の中心となる部分である。本テストでは、モノローグ、二人の対話、講義、四人の討論といった様々なコミュニケーションの場面で英語が使われている。全て、目的や場面、状況が設定され、話し手の意図を適切に理解することが求められている。なじみのある実生活によくあるような場面設定で、コミュニケーションの手段としての英語使用のモデルを示している点は、学習指導要領と整合している。また、イギリス英語や英語を母語としない話者の音声も使われ、多様な話者による英語が使用されていることも、高く評価できる。さらに、正答率等の結果を見ても、英語の多様性が正解率に影響してはいないと考えられるので、アメリカ英語以外の英語の比率を増やしてもよいのではないかと考え

る。

(3) 高等学校の授業改善への影響

本来リスニング力は、コミュニケーションを取る際に必要となる情報の理解力であるが、一般的な学校でのリスニング指導としては、教材を利用して聞き取り問題を解かせる傾向がある。本テストは、日常的な話題や実生活によくある場面と状況設定のもと、聞こえてくる英語の流れと内容、話者の意図や含意を適切に聞き取り、やり取りをすることを想定した問題設定になっている。使われる表現については、聞こえてくる情報とは異なる表現で選択肢に示されていることが多く見られる。言い換えができることは、実際のコミュニケーションにおいて理解のみならず、意味の確認をする上では必要なスキルであり、リテリングやサマリー活動等の授業内活動で意識したい。また、最初に聞こえたものを短期記憶に留める力を身に付けることも現場の指導で意識したいところである。実際の会話の中でも、会話の途中で意見が変わったり、不要な情報が入ったために、真意を掴みにくくなったりする場合もある。そのためには、授業改善として、実際のコミュニケーション活動を通して、様々なトピックにおける会話を経験させる必要があることは、指導者として覚えておきたい。

本テストでは、リスニングに特化した教材使用の指導にならずに、語用論を意識し、目的や場面、状況と発話の含意と文脈、話者の意図などを理解する活動が必要であることが明確に示されている。そして、そのための4技能を統合した言語活動を組み込んだ授業が求められているというメッセージを、本テストは高校現場をはじめとする教育現場に発信している。これは、知識・技能にのみ捉われず、コミュニケーション活動によって、思考力・判断力・表現力等を身に付けさせることの重要性を示しており、4技能を統合した言語活動を取り入れる授業改善への大きなメッセージになっている。

(4) 要望・提案

今後も引き続き、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）のA1からB1レベルの幅広い力を測る問題作成において、実生活にありそうなコミュニケーションを目的とする場面・状況設定があり、思考力・判断力・表現力等を必要とし、話者の意図、含意と文脈、内容理解を問うものを希望する。

内容については、受験者が既存の知識や体験などに関連付けて理解できるような話題、身近な暮らしや社会に関わる題材で、日常生活で用いられる自然な表現を示していただきたい。実際にありそうな状況で、相手の言ったことを確認し、共感的に受け止める言葉でコミュニケーションを取る話者のモデル提示から、受験者は大いに学ぶことができる。トピックとしては、時代や社会情勢に合う教育的なトピック（今回の第2問の間9、第3問の間17、第5問）が望ましい。しかし、その際には、受験者の持つトピックに関する背景知識の有無で聞き取る内容の理解に差が出ることがないものを要望したい。